

講演

異境からのまなざし ——テオドール・W＝アドルノの社会的・ 美学的著作における亡命経験

1. 実施要領

講師 エバーハルト・オルトラント（ドイツ・ヒルデスハイム大学哲学研究所研究員）

日時 2010年9月30日（木）午後3時30分～6時

場所 大学院国際文化学研究科E棟4階 学術交流ルーム

主催 異文化研究交流センター・メディア文化研究センター

通訳 藤野 寛（一橋大学大学院言語社会研究科教授）

講師略歴

ドイツ・ヒルデスハイム大学哲学研究所研究員。哲学博士（ポツダム大学）。美学・比較哲学専攻。Th. W. アドルノ『遺稿集』の編者の一人を務める。

2. 講演内容

異境からのまなざし ——テオドール・W＝アドルノの社会学的・美学的著作における亡命経験

エバーハルト・オルトランド

みなさんにアドルノについてお話しするようお招きいただいたことは、わたしにとって大きな名誉であり、講演に続いてみなさんと議論できることは喜びでもあります。

私のテーマをことあらためて導入する必要はないでしょう。といたしますのも、ある意味で、すでに私はそのテーマの真っ只中に身を置いているからです。ドイツの哲学者で社会学者テオドール・ヴィーゼングルント＝アドルノが、20世紀の30年・40年代にアメリカでの亡命生活中になした異なるものの経験、そして、すでに亡命生活中だけではなくドイツ帰還以後にも彼が一連のテキストの中で反省を加えた経験を手がかりにして、私は、異境からのまなざしという現象について、お話ししたいと思います。

私の講演は、8章に分かれます。異なるものという問題、あるいはより一般的に、異なるものという現象に関する導入的な考察から始めます。それに続いて、アドルノに目を向け、彼がその出発点において身を置いたポジションと経験の背景について、その特徴を取り出すよう試みます。その後で、彼の亡命経験に立ち入り、5段階にわたって論じたいと思います。そして最後に、私の思うところ今日私たちが直面している問題を考えるために、アドルノが彼の亡命経験とどのように取り組み、遠くからのまなざしをどのように実り多いものとしたか、そのやり方から何を学びうるのか、についての考察で締めくくります。

【1】 異なるものについては、私たちは誰もが経験をもっています。自身がすでに過去に一定期間異邦に暮らしたこともあれば、なじみの環境の中で異なるものが私たちに遭遇してくることもあります。現代の交通とコミュニケーション手段、そして国際交流の強まりのおかげで、とりわけ過ぐる二世紀において、両者の可能性は、類を見ない仕方では膨らみました。そして、私たちに当たり前のように要求される現代生活の形態の土台になりました。神戸市は、もっぱらこのような発展に基づいてこそ今日ある姿となっているわけです。港がなければ、そして、国際的な通商と人的交流の可能性がなかったならば、この街の実質をなしているものは何一つ存在しなかったことでしょう。大学もなければ産業もなく、サラリーマンもいなかったでしょう。せいぜい、若干の漁師と農民、そしてわずかな数のサムライがいただけでしょう。

アドルノが生まれ活動した街フランクフルト・アム・マインから神戸までの隔たりは9256kmです。これは、アドルノが1940年代に亡命生活を送ったロサンゼルスまでの隔たり(9329km)とほぼ同じであり、また、ロサンゼルスから神戸までの隔たり(9223km)ともほぼ同じです。アドルノは、1938年2月にイングランドからニューヨークへ大西洋を渡ったのですが、それにはなお8日間を要しました。そして、ニューヨークからロサンゼルスまでアメリカ横断の汽車の旅は3日かかりました。そこに彼は、1941年11月に移り、続く8年間、そこに留まることになったのでした。もう一人のドイツの亡命者カール・レーヴィットは、1936年にナポリから船に乗り、スエズ運河を通過してコロombo・シンガポール・ホンコン、そしてシャンハイ経由で神戸まで旅をしたのですが、この距離を移動するのに33日を要しました。今日では、およそ15時間で、フランクフルトからロサンゼルスまで、あるいは大阪まで飛ぶことが可能です。この事実は、文化的に異なる状況と出会う機会を経験する可能性を容易にしています。しかし、もし私たちがこの事実に慣れてしまうなら。この状況は、ひょっとすると、私たちにしてもは多少しも異なるものではなくなっているのかもしれない。あるいは、それとも、依然として、なじみのないものであり続けているのでしょうか。

ドイツの社会学者ルードルフ・シュティヒヴェーは、スイスで仕事をする数多くのドイツの学者の一人で、2003年以来ルツェルン大学で教鞭をとり、2006年からは同大学の学長の地位にもある人ですが、ニクラス・ルーマンと共に、次のように想定しています。つまり、私たちは、自らが活動している社会を「世界社会」

として理解することを学ばねばならない度合いがどんどん高まっている、というのです。そして、事実確かに、今日ここで私がみなさんの前に立ち、みなさんにお話している事実は、コミュニケーションが国や言語の境界のせいで停止することは決してない、という事実の証拠として十分に評価されうるものでしょう。そのことが、個々人の内に、どれほどの困難をもたらすことになっていようとも、そうなのです。学問体系において、法体系において、経済システムにおいて、また芸術システムや境界を取り払われたインターネット空間においてそうであるように、多くの領域において、越境するコミュニケーションを私たちが日々その中で活動する参照枠とみなす、ということは、多かれ少なかれすでに自明のこととなっているのです。他の領域においては、網は未だそれほど広く張り渡されてはおらず、個別システムの断片的分割の下に織り込まれているのかもしれませんが。しかし、政治の領域においても、互いに国境線を引き合う国民国家のシステムと並んで、越境するコミュニケーション形態がこれまた幾重にも重要な役割を演じてすでに久しいのであり、宗教的コミュニケーションの領域においては、正しい信者がその都度不信心者として軽侮する他者に対して線引きをし排除することで巨大な不合理性のポテンシャルを繰り広げるといふ事態も起こりうるのですが、しかし、そこでも、越境するコミュニケーションは、何千年このかた、普遍的なものとして自己理解し、理想的にはすべての人間を引き入れるパースペクティブの中で — それをもたらすありとあらゆる葛藤・軋轢を伴いつつであれ — 幾重にも生きられている実践なのです。

少なくとも、社会的な「外部」なるものをこの世界社会の向こう側に考えることなどはやできないという意味において包括的なグローバル社会のシステムと私たちがかわりをどんどん深めているのだとすると、（あるいは、ひょっとすると、それどころか常にそうであったのだとすると） — この特定の社会の境界の向こう側にはその都度いつもさらに別の社会が存在し、それに対して一定の対外関係が保持されたりされなかったりするという風に想定されていたかつての社会についての表象とは異なって — 異なるものの位置への問いは、新たに立て直されることとなります。異なる人というのは、実は、コスモポリットに他ならないのではないのか、と。ただ彼は、グローバルな社会秩序が、シュティヒヴェーが考えるようには未だ完全には定着していなかった、というそれだけの理由で、異なる人と呼ばれていたに過ぎない、ということなのではないか、と。だとすると、異なるものの社会学というのは、「世界社会の前史」に他ならない、ということになるでしょう。世界社会 — それは、これからようやく完全なものになる、ということではないのでしょうか — の中では、本来誰一人、異なる人と呼ばれうる人など存在しない、ことになるはずなのでしょう。

このようにもユートピア的な状態を私たちが体験するであろうと考えさせてくれるものは、さしあたり多くはありません。同じコミュニケーション手段、同じ消費財、同じ流行市場、同じファストフードのチェーン店が世界規模で広まってゆくことを通して、平準化傾向が強まってゆくことは確実であるにもかかわらず、私たちの世界経験は、ここ当分の間は、社会的・文化的異質性というその都度主観的な経験によって、また他者によって異質なものというカテゴリーに帰せられるものによって刻印されてゆくことでしょう — その際、決して無視することができず、せいぜい個人の内ですらうじて和らげあるいは克服することができるにすぎない帰結を伴いつつではあるのでしょうか。仮に、私たちが世界社会の中に生きているのだとしても、それは、明らかに、異質性が何の役割も演じないような世界社会であるのではなく、それ自身の内で差異化され、分割された社会なのであり、それは多様な形態の異質性を生み出し、自らも異質さとの、異人（外人）との、異質なものの、異和感を抱かせるものとの様々なかたちの交渉を必要ならしめるような社会であることでしょう。

だからこそ、分節化して表現する能力を備える同時代人が異質なものの経験を表現した記録を追跡することは、なすに値する作業なのです。そして、そのような証言の中で、テオドール・W＝アドルノがアメリカ経験について書いたテキストが、もっとも注目に値するものの一つであることは、確かなことでありましょう。

【2】 異境からのまなざし — その問題に、今日のこの講演で私は主として集中的に取り組むことになるわけですが — に先立って、またそれと並べて、異境へのまなざし、というものへと考察が及ぼされねばなりません。つまり、アドルノが、亡命先であるアメリカ合衆国へと投げかけたまなざしであり、この国が、またそこで特徴的となっていた生活形態がそれを彼が見たようなものとして彼の目に映っていた、そ

のまなざしです。このまなざしは、アドルノの出自によって、そして、アドルノが1933年のナチによる政権掌握以降、亡命生活に入ることを余儀なくされた歴史的條件によって特徴づけられています — それ以外にどうありえたというのでしょうか。しかし、同時に、このまなざしは、哲学者、音楽家、文化社会学者にして批判的社会理論家であったこの人が、その若き日々には練り上げていたカテゴリーと直観形式によっても、また媒介されていたものなのです。

アドルノの家族史に目を向けることは、彼の亡命経験との関連で興味深いのですが、それはとりわけ、アドルノ自身が社会学的論稿「家族の問題に寄せて」(1955)の中で(次のように)確認しているからです。

「極限的な条件のもとでは、そしてそれと直接する帰結においては、例えば、亡命者においてそうであるように、家族は、なんといってもやはり強いものであることが証明され、生き延びるための中心として、幾重にもその力を発揮する。」

テオドール＝ルートヴィヒ・ヴィーゼングルント — というのが、彼の洗礼名ですが — は、1903年、フランクフルト・アム・マイン市に、中産階級のユダヤ人商人であったオスカー＝アレクサンダー・ヴィーゼングルント(1870-1946)の一人っ子として生まれました。母親、マリア＝バーバラ・カルヴェリ＝アドルノ(1865-1952)は、歌手として名を知られた人だったのですが、コルシカ島出身の移民であるジャン＝フランソワ・カルヴェリ＝アドルノ — この人は、フランスの将校だった人で、フランクフルトでは、定住外国人として市民権なしに生きていました — とオッフエンバッハ・アム・マイン生まれの歌手エリーザベト・ヘニングの娘でした。この母親の側から、音楽が、家族の中に流れ込みました。移民であり、定住外国人であることからくる部分的には微妙な社会的位置に伴う経験は、両方の家族の中に、ありありと現前していました。父親の弟の一人は、エンジニアとして英国に移住しました。この叔父は、1934年には、若き亡命者や、それに続いた親族にとって、ロンドンにおいて最初に身を寄せる先となりました。アドルノの父自身、ある時期、イングランドに住んだ経験があり、リベラルで英国びいきの生活習慣を大切に養っていました。それに加えて、イングランドにワインを輸出していた会社の商売上のコンタクトが存在していました。

アドルノが成長することになった環境を理解するためには、まず第一に、少なくとも父親側の家族のフランクフルトの社会への統合は、19世紀の終わりごろには成功裡に達成されていた、という事実が、踏まえられるべきでしょう。ワインの大規模な商いは、1922年にはすでにその百周年を祝うことができていました。アドルノの曾祖父であるベルンハルト・ヴィーゼングルント(1801-1871)が、これをフランケン地方のデッテルバッハからフランクフルトに移し、1867年には、特別に優遇された場所であるマイン川河畔に面する場所に定着して以降、商売は繁盛していました。この地で、彼の息子でアドルノの祖父であったダーフィット＝テオドール・ヴィーゼングルントは商売を継いで成功し、その商売はその息子でアドルノの父であるオスカー・ヴィーゼングルントに譲られたのでした。1871年以来、ドイツ帝国領内では、ユダヤ人は法律上、もはや差別を受けることはありませんでした。とはいえ、反ユダヤ主義的な怨恨と、社会的同化への圧力が存在しなかったわけではありません。アドルノの母親は、カトリックのキリスト教徒でした。父親は、ユダヤ教に対して、そして実質的にはすべての宗教に対して距離を置いていました。1920年には、ユダヤ教区から脱会しました。その子供は、1903年にフランクフルトの大聖堂で、カトリックの洗礼を受けます。しかし、この若者は、宗教の教師の影響もあって、プロテスタント信仰に接近し、プロテスタントの堅信礼を受けました。にもかかわらず、学校では、ユダヤの子供と見なされていました。

すでに学校の生徒として、アドルノは、フランクフルトにおいて、同級生の側からなされる社会的排除と攻撃を経験することになります。その中に、彼は、迫りくるファシズムの先触れを見ることになります。

「ひとりで居ることの好きな学友に襲いかかり、さんざんに彼を打ちのめし、その学友が事の次第を教師に訴えたとき、クラスの裏切り者呼ばわりした五人の愛国者たち — ドイツでは囚人たちが虐待されていると語った外国人を嘘つき呼ばわりしつつ囚人たちを虐待したのは、彼らではなかったのか？」 (§ 123, 299 頁)

一見したところでは完全無欠な世界 — 音楽の才能に恵まれ、両親の家で多方面の教育を受けた一人っ子は、そこで育ったのですが — は、遅くとも、彼が学校に通った時点では、決定的なひび割れを経験す

るところとなっていたのです。

同級生に対する距離というものは、若きヴィーゼングルントに、単に外側から暴力的に強いられたのであったわけではありません。彼の側で自覚的にそれを捜し求めている、という面も、どうやらあったようです。1959年のラジオ番組のための講演「異国の言葉」の中で、アドルノは、第一次世界大戦中、ギムナジウムで、自分がどのように愉快地学友の一人と強制的に生み出された暗号を作り出し、周囲から距離を置こうとしていたのか、を思い出しています。その時代のナショナリズムによって支配された言葉の中では、外国語は、「抵抗のささやかな細胞」を表現するものだった、というのです。そこにさらに、もう一つのモチーフがつけ加わります。遠くにあるもの、他であるものに対する憧れです。

「若いときに異国の単語に惹かれるのは、(男性なら)外国の、望むらくはエキゾチックな女性に惹かれるのと似ている。言語上の族外婚に誘惑されるのだ。言語もまた、《いつも同じもの》の領域から、自分がそうであり、自分が知っているものの呪縛から逃れたがっている。あの頃は、外来語を口にすると、憧れの女の子の、誰にも教えなかった名前を言ったときのように、顔が赤くなったものだ。」(269頁)

母親、そして家族と共に暮らしていた叔母アガーテ・カルヴェリ=アドルノ — 達者なピアニストだった人ですが — を通して、小さなテディは、早くから音楽の世界に導きいられました。「彼は音楽を第一の媒体にして、家庭内の二人の女性に対して強固な絆を作りあげた。」(32頁) テディはヴァイオリン、ヴィオラ、そしてピアノを弾くことを学びました。音楽家になりたいと思い、16歳、アビトゥアを受ける前に早くも、彼はフランクフルトの高等音楽院で、作曲法とピアノに重点を置いて音楽を学び始めました。

一クラス飛び級をした後、アビトゥアをすでに17歳で一等賞の成績で合格したヴィーゼングルントは、それに続いて、哲学を学ぶべくフランクフルト大学に入学します。そこで彼は、心理学、社会学、美術史、そして音楽学の授業を聴きます。それと平行して、アドルノは、様々な新聞、雑誌のための音楽批評家として、活発なジャーナリズム活動を繰り広げます。大学で7セメスター学んだ後に、早くもアドルノは、同時代の哲学において熱く論じられていた問題に関する博士論文「フッサール現象学における物的なものとのノエマ的なものの超越」を提出することができました。この論文によって、アドルノは、1924年、21歳の誕生日を迎える前に、新カント派の哲学者ハンス・コルネリウスの下で博士の学位を与えられたのでした。

学位取得に続いて、アドルノは、ひとまず、アカデミズムの哲学に対して距離を置くことにし、ウィーンに移ります。アルバン・ベルクのもとで、個人的に作曲を学ぶためでした。ウィーンで8ヶ月を過ごした後、アドルノは、1925年、引き続き作曲家になり、音楽における前衛のブレイクに寄与したいという願いで心を満たしながらも、フランクフルトに戻ります。そして、音楽批評家としての活動は続けつつ、超越論的な心の理論における無意識説に関する教授資格論文執筆のための研究に着手します。彼の指導教官ハンス・コルネリウスの新カント派的超越論哲学の立場からするフロイトとの取り組みでした。(しかし)ちょうど24歳になったばかりのアドルノの教授資格取得の試みは失敗します。1928年1月、コルネリウスの勧告を受けて、アドルノは、この論文を取り下げます。音楽批評家として地歩を築こうとする試みについても、この年月、アドルノは、思い通りに成功を収めることはできませんでした。かくして、1929年、アドルノは、フランクフルト大学の哲学科で、二回目の教授資格取得の試みを敢行します。今度は、キルケゴールと美的なもの構成に関する研究で、アドルノはそれを、1931年、パウル・ティリヒのもとに提出し、首尾よく審査に合格することができました。この著作は、当時、とりわけマルティン・ハイデガーの作品を通して勝利の行進を開始していた実存哲学のキーワードの中心的提供者であったキルケゴールとの対決を通して、新しいポジションを展開するものでした。つまり、美学理解の基礎づけであり、この美学理解に、アドルノは、晩年の著作である『美の理論』にいたるまで導かれ続けることになるのでした。キルケゴールに関するこの著作において、アドルノの哲学的出発に決定的な刺激となったものを、アドルノは、ヴァルター・ベンヤミンから受け取ったのでした。ベンヤミンも、1925年当時、フランクフルト大学で教授資格の取得を試みたのですが、アドルノの師ハンス・コルネリウスとマックス・ホルクハイマーの抵抗にあい、失敗していたのでした。遅くとも、1929年以降、ベンヤミンは — アドルノは、すでに1923年には彼と知り合っていたのですが — アドルノにとって、知的に方向確認をするための抛り所を与える中心人物となりました。ベンヤミンの思考方法、経験、運命は、異なるものの、そして自分自身の亡命へのアドルノのまなざしをも特徴づけるものと

なったのです。

【3】 このキルケゴール論は、1933年3月に刊行されました。「ヒトラーが独裁権力を掌握した、その日のことでした。」ヴィーゼングルントはベルリンで、数々の事件の証人となります。しかし、国外に出ることは、さしあたり、まだ考えませんでした。1933年2月末に、ベルリンの帝国議会の建物が炎上し、それに続いてナチ権力者たちによる抑圧が波のように押し寄せるに至って、3月、ヴァルター・ベンヤミンはフランスに逃れます。イビツァに仮寓を見出すためでした。フランクフルトの社会研究所は、1933年3月13日に警察によって閉鎖され、差し押さえられました。マックス・ホルクハイマーは、それでもなんとか中立国のスイスに研究所を移すための準備を用心深く進めていました。1933年7月には、フランクフルトのオーバーラートにあったアドルノの両親の家が、警察による捜査を受けます。信用を破壊するような資料を捜してのことでした。1933年9月には、ユダヤの出自をもつという理由で、アドルノは、フランクフルト大学での教授資格を没収されます。出版しお金をかせぐ可能性は、消失しました。ヴィーゼングルントは、マーク・トウェインのトムソーヤを題材とする子供向けオペラの作曲という仕事に没頭します。どうやら、一定の譲歩をすることで、音楽家として、ドイツの時代精神に歩調を合わせることができないのではないか、あるいは、ウィーンで大学講師として、もう少しましな条件を見出すことができるのではないか、と期待していたようです。

そうこうする間にも、彼の父親は、息子のために、特にロンドンで暮らしていた叔父とアカデミック・アシスタンス・カウンシルを介して、イングランドに足場を固める可能性を探っていました。こうして、ヴィーゼングルントは1934年4月、イングランドに向けて旅立ちます。もちろん — 当初望んでいたように — ドイツでの教授資格のおかげでただちに助教あるいは准教授としてのアカデミズム内の地位を手に入れることができる、という風にはことは運ばなかったのですが。アカデミック・アシスタンス・カウンシルの勧めに従って、アドルノは、「上級学生」としての入学許可をオックスフォードで手に入れます。イギリスの博士号をとり、将来、イギリスの大学制度の中でキャリアを積んでゆくための礎石を置こうという計画に基づくものでした。秋には、メルトン・カレッジへの入学許可を受けます。フランクフルトでの博士論文を土台として、フッサール現象学における志向性と直観をテーマとする学位論文を執筆するというプロジェクトのためでした。そうすることで、2年間の滞在許可が得られることが確実となったのでした。1937年には、彼は、期間限定なしにイギリスに滞在する許可を得ることになります。しかし、経済的には、彼は、もちろん両親のお金に依存したままでした。そして、ドイツ帝国の通貨持ち出しのコントロールのせいで、そのこと自体が日増しに困難になっていったのでした。彼がオックスフォードに見出した条件はとても恵まれたものでしたし、ヴィーゼングルント自身、その点を十分に弁えていました。一方でイギリス滞在の許可を有しつつ、他方で公的には引き続きドイツに住居を持つという立場を得て、彼は、1937年まで、学期休みのたびごとにドイツに戻り、フランクフルトに両親を訪ねたり、婚約者のグレーテル・カルプスに会いにベルリンに行ったり、あるいはまた、一緒にシュヴァルツヴァルトやフランケン地方でヴァカンスをしたりすることができたのでした。1937年には、グレーテルをベルリンからロンドンに呼び寄せることに成功します。二人はロンドンで結婚します — かつてアドルノの両親がそうし、父親の両親もまたそうしていたように。

哲学の面では、ヴィーゼングルントは、1937年まで滞在了オックスフォードでの時間を、フッサール論やジャズやワーグナーに関する音楽社会学的研究に打ち込むことと平行して、特に、ニューヨークにあって、コロンビア大学の周辺で再組織化されていたホルクハイマーの社会研究所との関係を強化することに利用していました。1935年以来、彼は、研究所のヨーロッパにおける共同研究員と見なされていましたが、無給の身分でした。1937年に彼はニューヨークにホルクハイマーを訪ねます。自らの移住の準備をするためであり、1938年2月には実行に移されました。1938年アメリカ合衆国に移住したことによってようやく、ヴィーゼングルントは、ドイツから、法律的にも有効な正式の移住をすることになったのでした。アメリカで彼は、さしあたり、ヴィーゼングルント＝アドルノと名乗ります。すでに20年代以来、彼は、音楽理論の論考を発表する際には、この二重姓を用いていました。後にはしかし、アメリカ人には発音の難しいヴィーゼングルントのほうは省略し、あっさり、テオドール・W＝アドルノと名乗るようになります。ニューヨークで彼は、最初、プリンストン大学のラジオ調査プロジェクトのための共同研究員になります。すでに1934年にウィーンから移住していた社会学者パウル・ラザースフェルドによって導かれていたプロジェクトで、後にはそこから発展してメディア研究が出てくることともなる研究分野における先端的な仕事でした。しかし、メディ

ア受容の経験的な研究においてラザースフェルドと協働することの困難さが明らかになるに及んで、アドルノは1939年、ニューヨークの社会研究所の正式採用の共同研究員の地位に転じたのでした。

彼の両親もまた — ドイツで反ユダヤ主義的迫害にさらされる度が高まり、1938年にはワイン商が略奪され破壊されるということがあって — キューバでの途中滞在を経た上で、1939年にはニューヨークに移住することに成功します。ホルクハイマーは、ニューヨークの気候が合わなかったために、1940年、住居をカリフォルニア州の太平洋岸に移します。アドルノも、1941年、妻と共に後を追ひ、ロサンゼルスに移ります。そこで、ホルクハイマーとアドルノは、共同で『啓蒙の弁証法』を書き、それに続いて、アドルノは、1944年から49年にかけて、社会的差別に関する研究プロジェクトを主催します。1949年まで、ホルクハイマーとアドルノ、さらにはハリウッドの周辺で仕事をしていた同僚たちは、ドイツ、オーストリアから来た多くの知識人や芸術家たちと近所づきあいをしながら生活していました。アーノルド・シェーンベルク、トーマス・マン、ベルトルト・ブレヒト、ヘレーネ・ヴァイゲル、リオン・フォイヒトヴァンガー、ハンス・アイスラー、フリッツ・ラングといった面々です。

オックスフォード時代になって、しかも、ドイツにいる親戚たちが具体的抑圧を受けている事実に強い印象を受けて、ようやく初めて、アドルノは、ドイツのナチズム体制について、単に抽象的な政治的大惨事としてのみならず、実存的脅威としても真剣に受け止めることを始めます。1935年以来、彼に明らかになったのは、ヨーロッパで壊滅的な戦争が起こることなしにはすまないだろう、ということでした。そして、彼は、移住者として自分自身がおかれた状況とも取り組むことを始めます。亡命経験との彼の対決の最も重要な記録となったのが、『ミニマ・モラリア — 傷ついた生活裡の省察』でした。この書を彼は、1945年、カリフォルニアで、マックス・ホルクハイマーに50歳の誕生日を祝って献呈し、拡大された形で1949年に出版することになります。

【4】 『ミニマ・モラリア』 — 著者のもっとも成功した本です — は、多くの層からなる複雑な作品です。この本は三つの部分からなり、それぞれ、1944年（Ⅰ部）、1945年（Ⅱ部）、1946—47年（Ⅲ部）という日付けが打たれています。すべてあわせて153の、一見したところでは何の連関もなく互いに並置されただけの短い散文、アフォリズム — それらは、めったに1頁、あるいは2頁を超えることはなく、少数の少し長めの作品でもせいぜいが7頁どまりなのですが — から成っています。主観性が強調される『傷ついた生活裡の省察』は、著者の個人的経験から、多彩に語り出されます。しかし、アドルノのねらいは、自らの生活史を公的に広めることにあったわけではいささかもなく、むしろ、単刀直入な一般化をこそ特徴とするものでした。

「いまは罪のないよしなしごとというもののあり得ない時代だ。」（§5、18頁）

「誰でもたえず何か計画をもっていなければならない。」（§91、207頁）

「社会全体が狂っているときに正しい生活というものはあり得ないのである。」（§18、42頁）

傷つけられている、と著者によって見なされるのは、彼自身の人生だけではありません。そうではなく、「人生」そのものが、つまり、同時代人にあまねく可能である人生が、傷つけられているのです。そして、戦争が現に起こっている様 — それへとアドルノの省察は関係づけられているのですが — を眼前に思い浮かべるならば、私たちは、アドルノは正しいと認めなければならないのではないのでしょうか。

「この戦争が終われば生活はまた元の「正常さ」に戻るとか、まして(…)戦後にまた文化が復興されるであろうと考えるのは、たわけもいいところである。何百万というユダヤ人が殺害されたのであり、しかもこれは幕間劇のようなもので、カタストロフそのものは別にあるときている。この文化はこのうえ一体何を待ち設けるといふのであろう？」（§33、69頁）

戦争以前に「文化」とよばれていたものの「再建」について語ることは、もはや不可能です。回帰する途などありません。というのも、かつて移住者たちがそこに住まいしていた世界は、再建不可能な仕方破壊されてしまったのですから。

しかし、それだけではありません。アメリカにおいて、アドルノが自覚するに至ったことは、以前には彼自身にとってあれほどにも自明なものだった「文化」の概念そのものが根本的にどこかおかしい、ということでした。後年かかれたエッセイ「アメリカにおける学問的経験」(1968)の中で、アドルノは、彼のアメリカ経験の重要な要素として、次の点を確認しています。

「文化の概念を真剣に受け止める文化批判が、トクヴィルやキュルンベルガー以来、アメリカの状態との対決を通してそれにどのような異議を申し立ててきたにせよ、エリート的に身を閉ざすのでない限り、アメリカでは、われわれがその中で大きくなった文化の概念がそれ自体古びてしまったのではないか、という問いから身をかかわすことはできない。全体の傾向からして今日文化に起こっていることは、文化自身の失敗に対する決済になっているのではないか、という問いであり、文化が社会の制度の中に具体化されることなく精神の特殊領域の中に閉じこもってきたことでわが身に招きよせてしまった罪とかに対する決済になっているのではないのか、という問いである。」

彼の哲学上の主著である『否定弁証法』(1966)においては、アドルノは、同じこの問いを、これほど外交的配慮を伴わない仕方のようにあからさまに確認しています。「アウシュヴィッツ以降、すべての文化は、それへの執拗な批判も含め、すべてがゴミ屑である。」 「すべての文化」に対するこのにべもない拒絶が、アドルノの最終的発言となり続けるのか、それとも、これは、はなから彼一流の途方もない誇張 — それは、しばしば事態を明らかにしてくれるものでもあるのですが — の一つだったのではないのか — この点については、私たちはこの場で結論を出す必要はないでしょう。アドルノがアメリカで展開し、おそらくはアメリカでしか展開することができなかつたであろう異境からのまなざしへの問いと関連して重要なことは、彼がアメリカで「文化を信奉する無邪気さ — ドイツで彼はその中で成長したのですが — から解放された」という論点なのです。「アメリカで、(私は)文化を外側から見る能力を獲得したのです。」

アドルノに対しては、しばしば、偉大な芸術作品が絶対的に通用するというあり方への伝統的な夢にノスタルジックにしがみついている、という批判が投げかけられています。しかし、その反対こそが真相なのです。そのことは、『否定弁証法』や、『美の理論』の最初のページだけでも読んだことのある読者なら、誰でもわかることでしょう。「芸術に関することの何一つとして — 芸術の内部においてであれ、芸術の全体との関係においてであれ、芸術の存在権ですらも — もはや自明のことはないということ、そのことが、自明となったのである。」

異境からのまなざしは、アドルノを、もはや何一つ自明なものとは見なされないという地点に連れて行きました。そのようにしてこそ、彼は、ヨーロッパの文化にあって一体何が根本的に失敗に帰してしまったのか、という重要な問いを立てることができたのであり、人文科学において、通常、議論の地平の向こう側にとどまってしまっている決定的な連関について話題にすることができたのでした。

【5】 『ミニマ・モラリア』の中で、アドルノは、彼自身の生が傷つけられる様を直視し、それに表現を与えようと試みているのですが、彼にとっては、ファシズム、戦争、商品経済、家父長制、文化産業、道具的理性 — あるいは、やりそこなわれた人生の形態が個別にどのように呼ばれうるにせよ — が私たちの生にもたらした破壊を測定することだけが重要であったわけではありません。彼は自らの身の上に経験された傷を、範例をなすものだと理解しています。個別的なものの中に一般的なものも認識されねばならないのです。それは、他の人々にとっても重要であり、それどころか、ひよっとするとすべての他の人々にとって重要なものであるのかもしれないのです。瞬間ごとに撮影される傷つけられた生の中から声を発する絶望の深さにもかかわらず、アドルノを動かしていたのは、批判への動機でした。日常生活の、一見したところではさして重要でもない些細な事柄に研ぎ澄まされた観察の目を向ける中で、アドルノは、そこにおいてまさに誤りであるものの痕跡を探り当てようとするのです。そして、小さな事柄の内に潜む誤れるものが、「何百万という人間の肺を計画的にガスで引き裂く」 (§ 149, 369 頁) という人類規模での犯罪とどのように関連しあっているのかを探り当てようとするのです。あるいは、産業化された戦争の遂行 — それをアドルノは、「害虫退治の「いぶり出し」をおおがかりにしたもの」 (§ 33, 71 頁) と描いているのですが — とど

のように関連しあっているのか、を。アドルノの『傷ついた生活裡の省察』を支えているのは、異なる生、より良い生の形態が可能でなければならない、非業が結論であるなどということがあってはならない、とする、根絶不可能な願いなのです。

ドイツにおいて戦争が終結した直後 — 日本におけるむごたらしい終焉を迎える前に — ロサンゼルスユダヤ人協会で、そこに集まる亡命知識人たちを前に行われた講演の中で、アドルノは、亡命者がその身に加えられる不正によって味わうところとなる経験の帰結について、次のように表現しています。「もし、私たちの経験が、私たちに何かをするように義務づけるとするならば、それは、抑圧に抵抗する、自己保存に汲々とする人であってさえも認識せずにはいられないような不正に抵抗する、ということです。」

もちろん、アドルノは、何ら媒介されることのない「願望思考」は、それ自体では、むしろ災いに手を貸すものとなりかねないということを、正確に自覚していました。だからこそ、彼は、『ミニマ・モラリア』の中で、亡命者たちがそこから逃れてきた社会ともった経験、彼らが受け入れてもらえた社会ともった経験、そして何よりも、異境に身をおく自分自身ともった経験を、いささかの手心も加えることなく直視することの必要にこだわり続けたのでした。

「亡命中の知識人は例外なしに傷ついているものだが、この事実は自らすすんで認めた方がよい。さもなければ、自尊心の密閉した扉のかげで残酷にそのことを思い知らされるだけだ。彼をとりまいているのは彼にとっては理解しがたい世界であり、この点はどんなに彼が労働組合の組織や自動車交通の事情などに精通していても変わらない。いずれにせよ、彼はしょっちゅう間違いばかりしでかすのである。大衆文化の独占下における自分の生活の再生産と内容的に責任のもてる仕事の間には、橋渡しの利かない裂け目が生じている。また彼は国語を奪われており、かつて彼の認識のエネルギーの源であった歴史的次元は、すでに掘りくずされている。政治的に統制された固定したグループが形づくられるにつれ — そうしたグループは敵の刻印を押したほかのグループに敵愾心を燃やすだけでなく、内部のメンバーに対しても疑り深いものだ — かつて彼の孤立は深まっていく。それに自分たちにふりあてられた国民総生産高の分け前が微々たるものであるため、外来の亡命者たちは一般の競争社会に輪をかけた内輪の競争に駆り立てられ、絶望的な共食いを演ずることになる。そうしたいろいろなことは、個々人の内面にかずかずの汚点を残さずにはすまない。(…) 国を追われた者たち同士の関係には、土着の人間同士の場合以上にとげとげしいものがある。またあらゆる度量衡に狂いを生じ、光学も攪乱されている。(…) 亡命者の目は血走りつつ、対象をとらえ、むさぼり食い、差し押さえようとする、冷ややかな色を放っている。こうなってくると、自他に対して手心を加えぬ診断を下し、事態を自覚することによって、たとえ災いそのものを逃れることはできなくても、それにつきものの盲目性というまがまがしい威力を殺ぐように、できるだけやってみるしかない。」 (§ 13, 31/32 頁)

アドルノが、亡命時代に友人や同僚と交わした手紙の数々が公開され読めるようになって以来、私たちは、アドルノが、亡命者たちの中での競争関係という醜い側面にも言及するとき、実は、どれほど自分自身のことを語ってもいるのか、ということを見て取ることができるようになりました。それは、次に引用する助言にも当てはまることなのです。

「それから個人的な交際の相手を選ぶ場合には — 選択の余地が残されているとしての話だが — くれぐれも用心してかかること。とりわけ「何かを期待できる」ような勢力家を探すのは止めにした方がよい。利益をお目当てにするのは、一般にその名にふさわしい人間関係をきざく上で最悪の障害である。まっとうな人間関係があとで互いに助けあう連帯感に発展するということはあるかもしれないが、逆に始めから実際的な目的が念頭にある場合にそうした関係が生まれるはずがないのだ。それに劣らず危険なのは、権力の影絵ともいべきお茶坊主たち、恵まれている相手と見ると、経済的に治外法権的な境遇にいる亡命者仲間でもしか見られぬような大時代なやり口でとり入ろうとするおべっか使いやたかり屋である。彼らは自分たちを保護してくれる者のために一寸した便宜をはかったりする、また保護者の方も外国ぐらしの不便さからついそうした便宜を受けがちなものだが、するとたちまち彼らから悪しざまに言われる、といった目に逢いかねないのだ。」 (§ 13, 32 頁)

【6】 アドルノの亡命の時期に生れた記録で鍵になっているのは、1942年にカリフォルニアで書かれた「オルダス・ハックスリーとユートピア」というエッセイです。その書き出しを、私は短く、みなさんに読み上げたいと思います。

「ヨーロッパの破局はその長い影を前に投げていたが、ついにアメリカではじめて知的亡命者というタイプを生み出した。十九世紀に新世界に來た人びとを魅惑したものは、限りない可能性だった。彼らは成功するために、あるいは少なくとも人口過剰のヨーロッパでは見つからない生計の道を見つけるために、移住した。自己保存の関心が、自我を守ろうとする関心よりも強かった。そして合衆国の経済的好況は、移民を海の向こうに駆り立てた同じ原理で塗りつぶされていた。移住者が懸命に努力したのは、上手な適応であって批判ではなかった。批判は、へたをすると権利の要求や自身の苦勞が報いられる見込みをなくすかもしれなかった。生の再生産のための闘いに支配されて、新來者たちは自分たちの教養や過去や、社会課程のなかでの地位に無関係に、荒れ狂う現存在の猛威を免れることに没頭した。彼らが移住にユートピアの希望を結びつけていた限り、この希望そのものも、まだ測り尽くされない現存在の地平の上に勃興のメルヒェン、皿洗いから百万長者になる見込み、となつて現れた。百年前に、抑制なき平等のうちに非自由の面を感じ取ったトックヴィルのような訪問者の懷疑は、あくまで例外だった。ドイツの文化的保守派の隠語で「アメリカニズム」と呼ばれたものへの反抗は、新來者たちよりも、むしろポー、エマーソン、ソローのようなアメリカ人のあいだに存在した。

百年後に亡命したのは、もはや個々の知識人ではなく、層としてのヨーロッパのインテリゲンチヤだった。それは、けっしてユダヤ人だけではなかった。彼らが欲したのは、より良い生活ではなく、生き延びることだった。可能性はもう無制限ではなく、それゆえ適応の厳命は容赦なく経済競争から彼らの上へと移された。パイオニアが精神的にも開拓し、それに照らして自己自身を刷新するつもりだった荒野に代わって現れたものは、システムとして生全体を捉える文明だった。この文明は、ヨーロッパの自墮落な文化が大コンツェルンの時代になつても空けていたあの抜け道すら、規制を逃れようとする意識には与えない。

海を渡ってきた知識人に対して間違えようもなく指示されるのは、もし、なにがしかの収入を得たいならば — つまり超大型企業合同に集約された生に雇われたサラリーマンのたちのあいだに受け入れられたいならば — 自立的存在者としての自己を消し去るべし、という厳命である。この厳命にしたがって完全に順応しない反逆児は、巨大な物塊となつてそびえる物的世界が、おのれ自身を物としないすべての人に加えるショックにさらされる。だが、あらゆる面にわたって展開され、唯一それのみが承認されている商品関係の機械仕掛けの中で、なすすべもない無力な知識人がこのショックに反応する行動様式は、狼狽でしかない。」(137/138 頁)

狼狽（パニック）という要素、ショックをあたえるものというアメリカ経験のこの要素は、アドルノの知的発展にとって決定的に重要なものであったように、私には思われます。この経験は、亡命時代に書かれたアドルノの社会学的・哲学的著作の下地を塗る役割を演じています。もちろん、アドルノは、このパニックによって麻痺させられるような人ではありませんでした。それを生産性へと転換し、そこから『ミニマ・モラリア』の研ぎ澄まされたまなざしと、『啓蒙の弁証法』の分析のための思考力を苦勞して獲得することを成し遂げたのです。その点には、おそらく、アドルノが『ミニマ・モラリア』の中で語っている、把握し、飲み込み、押収するという行為の病的な側面、そして同時に冷たい側面も含まれているのです。アメリカでアドルノをそれほどにも度外れて驚愕させたものの経験にとって中核をなしているのは、自分が関わっているのは、単に、一つの異なる社会というものなのではなく — それなら、彼には、いつまでも疎遠なものであり続けたことでしょうか — そうではなく、異境にあって彼が直面しているのは、まさしく、資本主義社会における生活形態の発展が一般的にもその方向へと向かっているまさにそのものなのだ、という意識なのでした。

「市民社会の発展の全体の内部にあって、合衆国は、疑いなく、一つの極端に到達した。それは、資本主義を、言うなれば、完全に純化されたあり方において示しており、そこにはいかなる前資本主義的残滓もない。

しつこく広まっている見解には反するが、他の非共産主義的な国々や第三世界に属している国々もまた、同様の状態に向かって動いていると想定するならば、アメリカに対してもヨーロッパに対しても無邪気な態度をとっていない人にとって、アメリカは、最も進んだ観察のポジションを与えてくれることになる。実際、ヨーロッパに帰還した者は、そこに、初めてアメリカで目にとまったものうち限りなく多くのものが、兆しつつあるのを認めたり、確証されるのに気づいたりする、ということがありうるのである。」

アドルノは、日本に来ることは一度もありませんでした。しかし、60年代に日本で起こっていることをもし彼が観察したとするならば、おそらく彼は、自らの見解の正しさが証明されたと感じたことでしょう。

【7】 亡命先にあっても、かたときも、私が帰還への希望を放棄したことはありませんでしたと、アドルノは、1965年に語り、「亡命者として、罵られ辱められつつ追放された者として、そして、ドイツ人によって何百万もの無辜の人々に対して加えられた仕打ちの後であったにもかかわらず、何が私を変えることへと動かしたのか、を説明しようと試みています。アドルノは、決定的な動機として、持続性への感覚と自らの過去への忠誠、という言い方をしています。

「そのような忠誠は、異なる環境に順応せんがために自らを放棄するぐらいなら、むしろ、自己自身の経験が持ち場であると見なす場所、区別することが可能で人々を真に理解することができる場所で、何かを変えようと努力することの方を、求めるのです。私は単純に、私が子供時代を過ごした場所に戻りたかったのです。私にあって固有のものが最内奥に至るまでそれによって媒介されている所、そこへと戻りたかったのです。人が人生において実現することとは、子供時代を取り戻そうとする試みと、ほとんど違いがない、そのことを私は感じ取りたかったのです。」

アドルノが、ここで子供時代を取り戻すことという言い方で念頭に置いているものは、おそらく1966年に「アモアバッハ」というタイトルのもとに公にされたテキストを見ることで理解可能になるかと思われる。アモアバッハというのは、オーデンヴァルトにある村のロマンチックな名前です。フランクフルトからほど遠からぬ所にあり、ヴィーゼングルント家は、夏休みにはヴァカンスの場所を選ぶことを常としていました。そして、この村は、アドルノにとって、どうやら、フランクフルトの町よりも強く、彼の故郷のイメージの精髓をなすものであったのです。

「中央通りには、角っこに愛すべき郵便局があって、けたたましく唸りを立てて火を燃やす鍛冶屋があり、中を見ることができたのだ。毎朝とても早くから、大きな音を立てて鉄を打つ音がして、私は起こされるのだ。でも、私はそのことで怒ったりはしなかった。その音は、私に遠の昔に過ぎ去ったものこのだまを聞かせてくれたのだ。すでにガソリンスタンドが存在するようになった20年代までは、少なくとも、鍛冶屋が存在した。アモアバッハでは、ジークフリート — ある話によれば森の中の深い谷間にあるツィッテンフェルトの泉のところで打ち倒されたことになっているのだが — のかつての世界が、子供の形象の世界に食い込んでいたのである。」

破壊されたドイツへと帰還した後になって、アドルノは、再びアモアバッハを訪れます。そして、1950年、そこから、ニューヨークにいる年老いた母親に宛てて、次のように書き送ったのです。

「それは(…)私に残された故郷の唯一のかけらです — 外見では何も変わっておらず、場合によっては以前よりももっと眠りこけているようです。そして、もし、どこかでそれが可能であるとすれば、私はここでこそ、まるであなたが以前と同じように私のそばにいるかのような感情を抱くのです。」

この彼にとってそれほどにも貴重な小さな故郷の経験に、アドルノは、1966年、アモアバッハのアフォリズムの中でもしっかりと定位するのですが、しかし、その経験は、いまや、異境からのまなざしによって媒介されたものとなっているのです。

「アメリカに来ると、すべての街が同じに見えるものだ。技術と独占の産物である規格化というものは、人を不安にする。質における差異というものを進歩する合理性は方法において根絶するものだが、それと同じように、実際の人生においても消え失せてしまったかのように思えてくる。そして、人が再びヨーロッパに戻ってくると、ここでも、様々の場所が、子供時代にはどれもが比べようもなく違っているように見えたというのに、突然、互いに似通ってくるのだ。アメリカ — それは、異なるものをすべて平らにならしてしまふ — との接触のせいであれ、かつては様式であったものも、すでに何ほどかまずは差無邪気に産業の、とりわけ文化産業のせいにされるとしたもののあの規格化する強制力を備えているからであれ。アモアバッハもミルテンベルクもヴェルトハイムも、そこから除外されてはいない。家々に伝えられるこの地域の地層である、赤い砂岩という基調を通してそうなるのだとしても。にもかかわらず、しかし、ある決まった場所にかぎってのことではあるが、幸福の経験が、取り替え不可能なものの経験がなされるのだ。たとえ後になってみれば、それは唯一無比でなどないということが証明されるのだとしても。正当にであれ不当にであれ、アモアバッハは私にとってあらゆる町の原像となった。他の町はすべてそのイミテーションになってしまったのだ。」

「半ば成人してただ一人、夜遅くに小さな町をうろついているとき、私は、石畳の上に自分自身の足音が追いかけるように響くのを聞いたものだった。1949年に、アメリカでの亡命生活から戻り、二時に夜のパリをカルチエ・ラタンからホテルに向かって歩いてきたときに初めて、私は、それと同じ足音が聞こえることに再び気づいたのだ。アメリカとアモアバッハとパリの違いは、パリとニューヨークの違いよりも小さいのである。」

【8】 結びに入ります。要約するならば、アドルノのアメリカ体験は、次の点を通して特徴づけることができるでしょう。何よりもアドルノは、異境にあって、本質的に彼に固有であるものに対する深い理解を練り上げたのだ、と。客人として暮らすことになった国で、彼に向けられた期待に、最初、彼は驚愕をもって反応しました。そして、この驚愕から、異なるものの尋常さに抵抗する中で、彼に固有のまなざしを練り広げる力を獲得したのです。追放の経験から、そして、亡命国でのレイシズムの刻印を受けた社会というものの経験から、アドルノは、人が不安なしに異なっていることのできる状態を、道徳的最小限として要求することになります。不安なく異なっておりうる可能性というこの基準の意義は — 世界のいたるところで、異なる人々に対する不安のために、社会が異なる人々に対して扉を閉ざし、異なる人々、逸脱する人々、違って考え違って語る人々に不安を抱かせるというような事態が生れている間は — いくら強調してもしすぎることはできません。

異境における経験、そして異なるものとの経験への省察の中で、アドルノは、経験の概念を練り上げ、それをいまや、「伝統と異なるものへの開かれた憧憬との統一」という風に規定するに至ります。ここにあるのは、経験についての要求の高い概念です。私たちがまずはなんとかして手に入れなければならないものであり、自ずから明らかになってくれるようなものではないものです。しかし、この要求は、私たちが避けて通ることのできない要求です。アドルノが、この要求を分節し表現にもたらしたことの内にこそ、おのが伝統についてかつてなく確信が持たなくなっており、また異なるものへの憧憬は一体何に向けられるのか、がもはやほとんど明らかでなくなっている世界の中で、今日、アドルノの現代的意義は存するのです。